

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2024

課題番号：19K12603

研究課題名（和文）香港における移住女性の再生産労働力配置 「グローバル・シティ」のジェンダー分析

研究課題名（英文）Migrant Women and the Reproductive Sphere in Hong Kong: Gender Analysis of Hong Kong as a Global City

研究代表者

大橋 史恵 (Ohashi, Fumie)

お茶の水女子大学・ジェンダー研究所・准教授

研究者番号：10570971

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、イギリス植民地期から中国への返還を経た2000年頃までの香港社会における再生産領域（家事・育児・介護をはじめとしたケアや親密性が関わる労働と身体性の問題領域）についての研究である。香港経済は、戦後の輸出向け工業化を経てやがて東アジアの金融センターとして成長してきた。こうした政治経済構造の変動の背後で、人びとの日常的な生存維持や次世代育成は、移住女性の労働力によって支えられていた。本研究は今日注目されるフィリピンやインドネシア出身の家事労働者の受け入れが始まる以前に、中国大陆からの女性移住者の労働力配置があったことに目を向け、植民地関係下での境界管理の変化をジェンダー視点からとらえた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

香港は移住家事労働者のアクティビズムがさかんであり、ILO189号条約の成立に向けた国際労働運動でも重要な役割を果たしたことから、研究面でも運動面でも大いに注目されてきた。本研究はこうした近年の動きにも意識を向けつつも、同時にイギリス植民地期からの歴史的連続性や中国大陆との関係に重点を置くことで、香港の再生産領域をより重層的な政治経済関係の変動のなかに位置づけた。イギリス領時代の新聞記事や香港政庁のアーカイブを辿ることで、1950年代頃から1970年代頃までの中国系家事使用人/家事労働者の労働関係の変化をとらえ、労働運動の萌芽やフィリピンからの受け入れまでの過程を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This study examines the reproductive sphere (labor and physicality issues related to care and intimacy, including housework, childcare, and nursing care) in Hong Kong from the British colonial period to around 2000, after Hong Kong was returned to China. The Hong Kong economy underwent post-war industrialization for export and eventually grew into a financial center in East Asia. Amid these political and economic structural changes, people's daily life and nurturing of the next generation were supported by the labor of migrant women. This study especially focuses on migrant women's labor from mainland China, who arrived before the recent influx of domestic workers from the Philippines and Indonesia, and examines changes in border management under colonial relations from a gender perspective.

研究分野：ジェンダー研究、フェミニスト政治経済学、国際社会学

キーワード：家事労働者 再生産領域 社会的再生産 ケア ジェンダー 境界管理 グローバル・シティ クィア 親密性

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象地域である香港は、家事労働者の国際移動に関連する学術研究の潮流のなかで大きく注目されてきた地域の一つである。香港はイギリス植民地統治時代から中国返還（1997年）を経て今日に至るまで、アジアにおける家事労働者の主要受け入れ地域の一つである。その歴史は長く、フィリピン政府が「新労働法」の下で公式的に家事労働者の海外送り出しを開始した1974年には、香港における受け入れは始まっていた。また香港社会は、家事労働者の労働運動の国際ネットワークにおいて重要な拠点を形成してきたことでも知られる。民主派の労働組合を統括してきた香港職工會連盟（HKCTU）が早い段階から家事労働者の組織化をサポートしてきたという経緯において、フィリピンやインドネシアのみでなくローカルな中国系の家事労働者の労働組合も積極的な活動を展開してきた。香港を拠点とした家事労働者の労働運動の連合体であるFADWU（アジア家事労働者組合）は、2011年にILO総会で「家事労働者のデーセントワークのための条約」（189号条約）が採択されるまでの過程やその後の広報活動でもさまざまなキャンペーンにおいて中核的な役割を果たした。

こうした背景において、香港の移住家事労働者については、これまで非常に多くの研究が蓄積されてきた（Constable 2007、伊藤 2007 ほか）。加えて東アジアにおける金融や貿易の中心都市である香港の社会的再生産を、国際移住女性たちが支えているという構図については「グローバル・シティ」（Sassen 2001=2008）としての香港を実証的にとらえる研究においても大いに注目されてきた（Chiu and Lui 2004, Lee, Wong and Law 2007）。研究代表者もこれまで再生産領域とジェンダーに関する共同研究プロジェクトを通じて、香港における家事労働者の労働運動の展開に関心を向けてきた。

本研究はこうした研究動向をふまえ、「グローバル・シティ」の再生産領域における女性たちの移住労働をフィリピンやインドネシアだけでなく、中国大陸まで包含して議論するものである。先にとりあげたような香港の移住家事労働者についての研究潮流のなかで、中国大陸から香港に渡り、家事労働者（あるいは家事使用人）として生計を立てた移住女性たちの存在についての言及は限定的であった。これまでの国際移動とジェンダーに関する議論において想定されてきたのはトランスナショナルな移動のありかたであり、「国家間移動」でも「国内移動」でもないリージョナルな越境のありかたについては見過ごされる傾向にあったと言えるだろう。一方で中国の社会史や人類学研究のなかでは、19世紀後半の広東省の絹産業の発展において非婚女性同士のコミュニティを形成して経済的に自立した女性たち（「自梳女」）が、後に絹産業の衰退においてイギリス植民地統治下の香港に移り住み、家事使用人になっていったという事実が知られてきた（Topley 1978, 可児 1979 ほか）。だがこうした研究のなかでとらえられてきた事象が、グローバル化のような現代的課題といかに結びつくのかについては、ほとんど議論が行われていない。本研究ではこうした二つの研究潮流の双方を見据えながら、香港という都市が「グローバル・シティ」として成長する過程において、再生産領域がどのように再編されてきたのかをジェンダーの視点から考察することを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、香港における社会的再生産労働力の配置が、東アジアのグローバル化への接合の過程においてどのように推移してきたのかをジェンダーの視点から考察することにある。具体的には以下 の類型に相当する家事労働者/家事使用人の移住労働のパターンをとらえた上で、イギリス植民地統治期から中国返還後までの時期の社会経済の再編において、それぞれの類型に該当する女性労働力がいかに位置づけられていったのかを明らかにする。

20世紀半ばまでに広東省一帯から香港に移り、雇用主世帯において住み込みで働いた（生涯を単身で過ごした「自梳女」に代表される）中国系の家事使用人たち
中華人民共和国成立以降に中国から香港に渡り、住み込みや通いの家事労働者として働くに至った女性たち
香港で住み込みの家事労働者として働くフィリピンやインドネシア出身の女性たち

3. 研究の方法

上記の類型 ~ に該当する家事労働者/家事使用人について、一次資料として20世紀初頭から現代にいたるまでの時期の香港のローカル紙（『華僑日報』『香港工商日報』『香港工商晚報』『大公報』『文匯報』等の中文紙およびSouth China Morning Post等の英文紙）から関連する記事を収集・整理したほか、政府檔案處に所蔵された家事労働者/家事使用人に関連するアーカイブ資料にあたった。またイギリス植民地統治時代に行われた歴史研究や文化人類学調査の成果（エスノグラフィ）を収集・精読し、時代的文脈の考証に努めた。

なお研究開始当初は、この研究をオーラルヒストリーの聞き取りを通じて推進することを想定していた。だが同時期に「反送中」運動が高まり、取り締まりが厳しくなったことで、研究代表者がこれまで培ってきたネットワークを介して現地で調査協力を得ることが困難になった。

加えて2020年以降は新型コロナウイルス感染症による渡航制限が続いたことなどから、インタビュー調査の実施は断念せざるを得なくなった。

4. 研究成果

(1) 再生産領域におけるリージョナルな越境とトランスナショナルな越境の連関

香港の再生産領域に関する先行研究は、フィリピンが家事労働者の送り出し政策を打ち出した1974年頃からの変化を中心に議論を展開しており、中国大陸に出自をもちリージョナルな越境を経て香港に移住した女性たちについてはほとんど関心を向けてこなかった。本研究ではイギリス植民地統治下における香港の社会的再生産が、かつてはリージョナルに越境する女性たち(中国系移住家事労働者/家事使用人)によって支えられ、ある時期からはトランスナショナルに越境する女性たち(フィリピンやインドネシア出身の家事労働者)に移り変わったという経緯を掘り下げてとらえ、リージョナル/トランスナショナルな境界管理のありかたがいかに変化したのかを追求した。

イギリス植民地統治下の香港は、歴史的に中国大陸から数多くの移民・難民を受け入れてきた。1950年代以降はその労働力供給において輸出志向工業化が支えられたことで、高度経済成長を実現したといえる。大陸出身の女性たちのなかには、20世紀前半から存在していた家事使用人(類型)のように、富裕層家庭で住み込みの家事労働者として働く者が少なくなかった。だが戦後の越境者のなかではやがて軽工業における就労が主流化し、住み込みの仕事は敬遠されるようになっていった(類型)。1960年代から70年代のローカルな新聞記事からは、共働きの中間層世帯が拡大していくなかで、家事労働者の不足が深刻な社会問題としてとらえられていたことがわかる。世論のなかには大陸からの中国人女性の新たな受け入れを求める声も少なくなかった。

だがそのような要望に反して、香港政庁は1970年代に入る頃には、大陸からの中国人女性たちの越境的流入に制限を設けていった。その背景には、出産可能な身体をもつ女性が大陸から香港に渡ってくることを避けたいという意図があったのではないかと考えられる。当時、生地主義において香港で出生した子は居留権(永住権)を申請することができ、そのことは宗主国イギリスにおける入国や居住の権利の問題にも波及した。とりわけ中国返還が交渉されていく段階において、香港居民というステータスにいかん制限を設けるかは、重要な政治的課題であった。この段階において、香港政庁はフィリピン人家事労働者の政策的な受け入れを推し進めたといえる(類型)。フィリピン人家事労働者の受け入れでは、最初の段階から標準雇用契約制度が導入されていた。この制度は、外国人家事労働者の在留期間を2年間に留めるとともに、使用者に外国人女性を監視・監督する責任を課すものとしてとらえられる。このような方針をとることで、再生産領域における中国系女性たちのリージョナルな越境を最小限に押しとどめるとともに、トランスナショナルに越境する東南アジアの女性たちの身体とセクシュアリティを管理し、差別化してきたと考えられる。

(2) 社会的再生産のコストとジェンダー関係の変化

上に概説したように、イギリス植民地統治下から今日に至るまでのあいだに、香港は中国大陸から多くの移住女性たちを受け入れてきた。1940年代から70年代頃までのローカルな新聞記事を読み解くと、歴史研究や人類学研究のなかで注目されてきた「自梳女」に由来する類型 の家事使用人たちの姿をとらえることができる。1958年の「大躍進」期の時期頃からはより多くの移民・難民が受け入れられ、住み込みで家事の仕事をする類型 の女性たちの数は増大していった。この時期の類型 と について、明確に区分づけを行うことは難しい。だが新規に香港に渡った女性たちのなかには、輸出向けの軽工業が発展していくなかで工場に働き口を見つけ、離職する者が多かったようである。また類型 の家事使用人たちもやがて高齢に達していくなかで、1960年代には家事労働者の人手不足が頻りに報道されるようになっていく。

こうした変化は、雇い主が家事労働者に支払う賃金の上昇を招いた。本研究では新聞報道を経年的に追うことで、家事労働者の月あたり賃金が120-150香港ドル(1963年)から漸進的に上昇し、1974年には600-700香港ドルにまで達していたことをつかむことができた。この時期のローカル紙には1970年代には時間あたり4-5香港ドルで働く通いの中国系家事労働者の出現についても報じられているが(類型)、現実にはフィリピンからの家事労働者受け入れ(類型)のほうが主流化していったように見受けられる。1974年の報道では、フィリピン人家事労働者賃金は、住み込みであっても「月あたり最低400ペソ」(約300香港ドル程度)であると示されている。(1)で示したように香港政庁はこの時期の境界管理政策において意図的に中国人女性の越境を回避し、フィリピンからの受け入れを開始したと考えられるが、その際、類型 は類型

よりも圧倒的に低い使用コストにおいて雇うことができるように制度づけられていたことがわかる。

また1960年代から70年代の新聞記事のなかには、洗濯機や炊飯器といった生活家電を取り入れることで「家庭主婦」が容易に家事を切り盛りできるようになり、家事労働者/家事使用人がいなくても生活を維持することができるとする記事も目立つようになる。社会的再生産のコスト上昇は、フィリピン人家事労働者の導入によってのみでなく、世帯内アンペイドワークによ

っても埋め合わせられるようになっていった。またこの時期の生活家電の購入に関する新聞記事のなかでは、往々にして月賦払いが推奨されていた。この趨勢は、中間層以上の日常生活が金融サービスと結びついて維持される状況の前触れとしてとらえることができる。

(3) 中国系家事使用人の経済的エイジェンシーとクィア親密性

中国をフィールドとした社会史研究や人類学研究のなかでは、19世紀末から20世紀初頭にかけて珠江デルタに出現した「自梳女」の存在が知られてきた。「自梳女」たちは機械製糸にたずさわることによって経済的に自立するとともに、独特の信仰体系の下で非婚を誓い、女性同士で共同生活を送っていたとされる。家父長制や異性愛規範を離脱した女性たちの存在は、往々にして奇異や侮蔑のまなざしにおいてとらえられ、掠奪や暴行の被害にあうことも少なくなかったようだ。「自梳女」たちの経済的エイジェンシーは、女性同士の共同生活以外の側面でもとらえることができる。「自梳女」たちは製糸業における稼ぎを金に換えて蓄財し、投資にも熱心であったようだ。また世界恐慌を背景にこの地域の製糸業が衰退していくなかで、香港やマカオ、海峡植民地へと移り、家事使用人として暮らしを立てたといわれている。本研究の類型 に相当する中国系の家事使用人たち（「媽姐」とも呼ばれる）はこの流れに位置づけられる。

本研究では香港に移住した類型 の家事使用人たちが、移住先でも経済的エイジェンシーを発揮しつつ、家父長制秩序や異性愛規範を覆すような共同関係を構築していた可能性をとらえ、そのような関係性を「クィア親密性」として議論した。戦後の高度経済成長、そして金融化の進展において、彼女たちのクィア親密性がいかに維持された／されなかったのかを、同時代的なローカル紙の報道や人類学的エスノグラフィの記述を参照しながら考察した。

一連の考察のなかでは1965年にごく短く活動していた「香港女傭工會」(香港メイド組合)についても議論を行った。この時期の香港社会に家事労働者の労働組合が成立していたという事実は、これまで中国語圏でも英語圏でも顧みられてこなかった。本研究は一次資料を掘り下げることで「香港女傭工會」の成立とその頓挫の経緯を追い、異なって生きる女性たちの主体位置がどのような困難に晒されていたのかを解き明かそうとした。

< 参考文献 >

- Chiu, Stephen W. K. and Tai-lok Lui (2004) "Testing the Global City - Social Polarisation Thesis: Hong Kong since the 1990s", *Urban Studies*, Vol. 41, No. 10, 1863-1888.
- Constable, Nicole (2007) *Maid to Order in Hong Kong: Stories of Migrant Workers*, Second Edition, Cornell University Press.
- 伊藤るり (2007)「香港における再生産労働の国際移転——深化するグローバリゼーションとジェンダー平等 の課題」, 北九州市立男女共同参画センター ムーブ 編『ジェンダー白書5 女性と経済』, 明石書店。
- 可児弘明(1979)『近代中国の苦力と「猪花」』, 岩波書店。
- Lee, Kim-ming, Hung Wong and Kam-ye Law (2007) "Social Polarisation and Poverty in the Global City: The Case of Hong Kong", *CHINA REPORT* 43 : 1, 1-30.
- Sassen, Saskia (2001) *The Global City: New York, London, Tokyo*, Princeton University Press (=サスキア・サッセン著、伊豫谷登士翁監訳、大井由紀・高橋華生子訳 (2008)『グローバル・シティ——ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』筑摩書房)。
- Topley, Marjorie (1978), *Marriage Resistance in Rural Kwangtung* in Marjorie Topley and Jean DeBernardi (2011) *Cantonese Society in Hong Kong and Singapore: Gender, Religion, Medicine and Money*, NUS Press and Hong Kong University Press

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大橋史恵	4. 巻 21
2. 論文標題 植民地期香港における家事労働者と使用者のアクティビズム 境界管理のポリティクスに着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国際ジェンダー学会誌	6. 最初と最後の頁 34-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32195/isgs.21.0_34	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 OHASHI, Fumie	4. 巻 48
2. 論文標題 Social reproduction process in colonial Hong Kong: The shifting gender relations of the intra-east Asian economy	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Japanese Political Economy	6. 最初と最後の頁 129-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/2329194X.2022.2154227	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大橋史恵	4. 巻 98
2. 論文標題 植民地期香港における家事使用人の「老後」 クィア・アプローチから考える	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 現代中国	6. 最初と最後の頁 5-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 3件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 大橋史恵
2. 発表標題 植民地期香港における中国系家事労働者の移動と生存 「ケア」と「クィア」の交差に着目して
3. 学会等名 日本現代中国学会第 73 回全国学術大会共通論題（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大橋史恵
2. 発表標題 香港社会の家事労働者と使用者 住み込みの「外籍傭工」と通いの「家務助理」の差異をめぐって
3. 学会等名 国際ジェンダー学会大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大橋史恵
2. 発表標題 黄金與姐妹關係：戦後香港家庭傭工の經濟能動性
3. 学会等名 中国當代史研究中心第十届中国當代史研究工作坊（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fumie Ohashi
2. 発表標題 Who Took Care of Migrant Care Workers?: Retirement Plans of Cantonese Domestic Servants in Colonial Hong Kong
3. 学会等名 2024 IAFFE Annual Conference（国際学会）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 伊藤るり編著、定松文・小ヶ谷千穂・平野恵子・大橋史恵・巢内尚子・中力えり・宮崎理枝・篠崎香子・小井土彰宏・森千香子著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 390
3. 書名 家事労働の国際社会学 ディーセント・ワークを求めて	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------